「村上春樹学」の構築を目指して

兼清　慎一

新しい学問の領域は、熱意ある一人の研究者から生まれる。台湾の淡江大学が去年八月に開設した「村上春樹研究センター」の所長を務める曾秋桂教授のことである。曾教授は今、「村上春樹学」と名付けた新たな研究領域を構築しようとしている。曾教授によると、村上春樹を専門に研究する拠点の設立はアジアでは初めてで、世界でも例がないという。「村上春樹学」とは一体どんなものなのか。なぜ、そのような研究領域を開拓しようとしているのか。曾教授が六月一二日、山梨県立大学の創立一〇周年記念事業の一環として講演に訪れた際、お話をうかがった。

「村上春樹研究センター」の前身は、淡江大学の日本語学科にあった「村上春樹研究室」である。二〇一一年八月に開設され、二〇一二年六月、二〇一三年五月、二〇一四年六月と、三回にわたって村上春樹をテーマとする国際シンポジウムを主催した。曾教授曰く「大学から「もっと発展させなさい」というメールが来て、予算がちょっとおりた」ことを契機に、学科の研究室が大学直属のセンターに、いわば格上げされた。今年七月には、四回目のシンポジウムを日本で（北九州市）初めて開催した。

このシンポジウムに先立って行われた山梨県立大学での講演は、曾教授と親交のある平野和彦准教授の招聘で実現した。「村上春樹と台湾――『小確幸』と台湾のいま！」と題した講演には、平日の昼すぎにもかかわらず、数十人が聴講に訪れ、わざわざ東京から来た方もいた。台湾語と日本語の比較から、台湾での村上春樹ブームの現状、さらには村上春樹と志賀直哉の比較にまで話が展開し、あっという間の一時間半

であった。

この講演のタイトルともなっている「小確幸」という言葉は、台湾での村上ブームを象徴する流行語だという。「小さいけれど確かな幸せ」という意味で、「ランゲルハンス島の午後」と「うずまき猫のみつけかた」という作品に登場する。台湾では二〇一三年から目立ち始め、カフェの看板、結婚式のプロデュースから、銀行の貸付金の申し込みにまで、「小確幸」がキャッチコピーとして使われている。ニュースの見出しやテレビ番組のタイトルとしても、よく目にするという。村上春樹ブームは、まさに社会現象となっているのだ。

台湾での村上春樹の翻訳を一手に手掛けてきたのが賴明珠さんであり、出版してきたのは「時報出版公司」である。およそ三〇年間で、村上春樹の本を再発行のものも含めて五九冊、翻訳しているという。「時報出版公司」の社長に曾教授が聞いたところ、「村上春樹の本を売るのは楽でいいです。何の努力をしなくても売れます」という答えが返ってきたという。この翻訳の積み重ねと共に、台湾での村上春樹ファンも積み上がっていった。

では、曾教授ご本人は村上春樹の作品が好きなのか。まず聞いてみた。

「最初はダメでした。そもそも「生きている人は研究してはいけない」と、周りの人からも言われていました。作品が次々と出て、定説が生まれないから。日本語を研究している人は皆、村上春樹を敬遠しますよ」。

村上春樹に興味がなく研究もしていなかった曾教授。なぜ、研究室を立ち上げたのだろうか。

「台湾での村上春樹研究の状況を私は調査しました。博士論文と修士論文、機関誌に掲載する論文、それにシンポジウムでの発表の四種類ありました。しかし、出版物は感想文ばかりで研究の範疇にまでいっていない。というのは、日本語が分からない、翻訳された本を通して理解しているから仕方がないのです。台湾の学生たちは、日本語ではなく中国語の翻訳を通して村上春樹を知り、研究してきました。だが、翻訳されたものと日本語のオリジナルは違います。私たち、日本語を知っている人が、日本語学科が貢献しなければいけない時期がそろそろやってきたと思うのです」。

日本語学科として文学研究という立場から村上春樹を研究するのは理解できる。しかし、研究センターまで作る必要があるのだろうか。

「いつも同じ質問を受けてきました。一体、なぜ、センターを作るのか。（村上春樹の英訳を手がけてきた）ジェイ・ルービンさんに初めてお目にかかった時にも、「村上春樹はこんな

センターを作って研究する価値があるの？」と言われました。もちろん冗談で」。

「私は「村上春樹学」を構築したいのです。台湾では、村上春樹の本を三〇年間読んできて、一緒に歳を取ってきた人がいます。その作品は、読むだけでなく、みんなの生活の一部分に入っています。作品の中で触れられた音楽を味わったり、文学の話をしながらディナーを食べたり、いろいろなイベントも開かれています。文学研究にとどまらない社会現象なのです。

経営学の中で、どうやって商品化するのか。心理学の面から見ればどうなのか。日本語の教材として使えるのか、日本語教育に生かせるのか。いろいろな面から村上春樹を研究することが実は可能なのです。もちろん哲学でもいい。作品の良さでもいい。批判でもいい。それぞれの専門知識で村上春樹によって書かれたテキストを研究したらどうだろうという単純な発想なのです。とにかく村上春樹に興味があるなら、どうぞ研究してください、ということです」。

村上春樹の研究領域を文学以外にも広げ、学際的な「村上春樹学」を構築する。これがセンターの目標であり、曾教授の構想である。加えて、台湾における日本研究の底上げをしたいという願いも込めている。

「台湾の日本語教育のレベルは世界的に考えると、高いレベルに来ています。日本語ができる、日本文学が読める学生も育ってきている。では、これからどうすればよいのか。日本そのものの研究にもっと興味を持ってもらえればどうか、と思うのです。

あいうえおから勉強して、卒業論文を日本語で書く。そういう伝統的な日本語学科は台湾にある。しかし、そこには日本の歴史や経済の話を聞ける専門的な人がいない。台湾では、日本語学科の研究者、日本語教師のグループと、それ以外の日本研究の人たちのグループが主導権を取り合っている。センターを通じて「村上春樹学」という構想を打ち出せば、両者を融合できる道があるのではないか。そんなことも実は考えています」。

ところで曾教授の構想には協力者がいるのか。気になって聞いてみた。

「文学研究以外の仲間も少しずつ引っ張ってきていますよ。中央研究院にいる心理学の研究者に一緒にやりませんかって。その方のご主人がアメリカ文学を研究しているので、一緒に引っ張ってきて、センターの諮問委員をお願いしています」。

「研究室は私の一存で作りました。お金も全くなかった。

でも、作った以上、何かをしなければいけません。だから、私の科目を変えたりして、年に一回シンポジウムをすることにしたのです。周りのみんなは巻き添えです」。

曾教授は笑顔を絶やさない。だが、語り口はエネルギッシュだ。私のインタビューは、午前中に学生とのワークショップをこなし、午後の講演を終えた後、大学にある和室で休憩がてら行われた。さぞかしお疲れかと思いきや、まだ話し足りないという様子で、少し早口の日本語で、まくしたてるように話してくださる。「村上春樹研究センター」のことを多くの人に知って欲しいという熱意からであろう。言葉があふれ出てきて、話にぐいぐい引き込まれていく。おそらく、この熱意を受け止め、周りの人たちが巻き添えになっていくのだろう。

曾教授を招聘した平野准教授も巻き添えになった一人である。去年、大連で行われたシンポジウムで曾教授と初めて会い、いつの間にか、日本でのシンポジウムの準備に奔走するようになっていたと言う。「私は中国近代文化が専門なので、村上春樹研究とは全く関係ないんですよ」と言いながらもどんどん巻き込まれ、シンポジウムのセッションでは司会兼コメンテーターも務めた。その平野准教授から曾教授の取材を仰せつかった私も巻き添えになりつつある。今年春まで二五年間、NHKの記者として数多くのインタビューをさせていただいたが、何かを成し遂げたいという魅力ある取材対象を目の前にすると、「自分もその挑戦を手伝いたい」と思ってしまう。曾教授はまさにそんな存在だった。熱意から来る周りを巻き込む力は、新たな研究領域を切り拓こうという研究

田中靖彦著

中国知識人の三国志像

文化現象としての三国志像は、古今を通じて中国を表す鏡であり、古の中国を分析する恰好の材料であると同時に、現在と今後の中国を知るための手がかりとなるというのが著者視点。陳寿の時代から宋代までの三国志をめぐるさまざまな言説について分析し、その同時代性と、三国志観が次第に〝正統〟の概念と深く関わるようになる経緯を考察する。

A5判370頁 6000円

藤谷浩悦著

戊戌政変の衝撃と日本

――日中聯盟論の模索と展開――

戊戌政変が日本に与えた影響について、日中聯盟論の推移を中心に考察。井上雅二日記・井手三郎日記をはじめ、これまで用いられなかった新聞、雑誌などの史料も博捜した重厚な研究書。中国の改革と日本聯盟論、日本のアジア主義と日中聯盟論、日中聯盟論の展開と亀裂、の三部構成で分析する。

A5判720頁 13500円

研文出版〈税別〉

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337

http://www.kenbunshuppan.com/

者にとって、極めて重要かつ必須のものだ。

それにしても、文学研究の対象としてさえ敬遠されているのに、「村上春樹学」という学際的な研究を育てようというのは、あまりに大胆な挑戦である。しかも、その事の始まりが曾教授らしかった。

「なぜ、私が村上春樹を研究するようになったのか。学生の存在が大きいのです。台湾の学生は、一五、一六歳のころ、村上春樹を読んで好きになって、日本語学科に入って勉強します。その中の一人が、村上春樹で修士論文を書きたいと、私のところにお願いしに来ました。彼は、大学、大学院と七年間、村上春樹とずっと付き合ってきていました。彼のために、私は村上春樹を勉強するようになりました。それが明るい未来、明るい世界に飛び込んだことなのかどうか、まだわかりません。定説はありませんから」。

私は、この言葉に心を強く動かされた。記者から研究の道へ。報道の仕事を楽しんでいた私が大学の教員になった理由の一つは、合気道を教わった神戸女学院大学名誉教授の内田樹先生のこんな言葉に憧れたからである。

「アカデミックな人というのは、基本的には知的な領域における「フロントランナー」であるわけです。「フロントライン」にいる人間なんです。でも、どこの誰に対する「フロントライン」なのか、背中に何を背負って「フロントライン」に立っているのか、ちょっとそのことを考えて欲しいと思うんです。（中略）僕は学問をするのは自己利益のためじゃなくて、「世のため、人のため」ではないかと考えている」（「最終講義　生き延びるための六講」技術評論社　四四頁、四六頁）。

自分の専門分野を超え、国境を超えて、新しい研究領域を切り拓こうという曾教授は、この「フロントランナー」だと思ったのだ。もちろん「村上春樹学」の構築はまだ始まったばかりであり、その成果は見えていない。だが、少なくとも一歩は踏み出した。研究という新しい道の入り口で、曾教授に出会えたのは望外の喜びであった。

ワークショップで初めて出会った学生にも熱意を正面からぶつけ、「村上春樹学を共につくりあげよう」と呼びかけた曾教授。ワークショップを主宰した吉田均教授は、学生に対し、こんな言葉で授業を締めくくった。

「諸君。これが国際人だ。君たちは本物の国際人を目にしているのだ」。

村上春樹本人は日本でのシンポジウムに来るのか。最後にどうしても聞きたかった。前回のシンポジウムとセンターの開幕式では、挨拶の言葉をもらっていた。村上春樹と親交の深い東京大学元教授で翻訳家の柴田元幸さんが仲介の労を取

り、実現したという。

「マスメディアの人、みんな聞きます。「村上春樹は来る？来るなら取材に行く」と。来るかどうかは、私が決めるものではありません。ご本人の判断です。私は先生の意思を尊重します」。

「前回のシンポジウムでは、「来るべき人は都合により来られませんでしたが、代わりに、こういうものを、この場限りで読ませて欲しい」と言って、ご本人から頂いた言葉を朗読しました。感動して、涙を流す人もいましたよ。村上春樹は、台湾で私たちががんばっていたことを見てくれたんだ、と」。

「まずは、日本でのシンポジウムを成功させます。最大の誠意を見せて、感動するかしないかは、ご本人次第ですけど、私はできる限りのことをやったから、来なくても悔いはありません」。

（かねきよ・しんいち　山梨県立大学）

曾教授の講演の様子

学生との様子

二〇一五年度　老舎研究会年会のご案内

本年度の老舎研究大会は、久方振りに東京で開催いたします。多くの方々のご参加をお待ちしておりますので、奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

▼日時：9月12日（土）13時～▼場所：御茶ノ水女子大学　文教育学部棟1号館302教室（最寄駅：地下鉄丸ノ内線茗荷谷駅）茗荷谷駅の前の広い通りに沿って左手の方向（大塚方面）にまっすぐ300メートルほど歩くと、（歩行者の）左手に正門があります。▼会費：大会参加費一、〇〇〇円、年会費二、〇〇〇円▼プログラム：1．開会の辞に代えて「老舎関連文献目録」店じまい報告（倉橋幸彦）／2．学会報告①「老舎作品出版の〝最〟」（小生常談）、②「日本における老舎『四世同堂』の翻訳出版状況」（布施直子）、③「『駱駝祥子』の結末について―戯曲『駱駝祥子』の改編を中心に―」（大山潔）　※年会終了後、懇親会を予定（五、〇〇〇円程度）。▼申込み先：老舎研究会事務局 TEL：072-834-7567　〆切9月5日。